

図書館通信 2・3月号 宇東図書委員会

2022年が始まって早一か月が過ぎました。先月19日、第166回芥川龍之介賞と直木三十五賞の受賞作品が発表されました。今月は、芥川賞・直木賞の成り立ちと今回受賞した3作品について紹介します。

～芥川龍之介賞と直木三十五賞～

芥川龍之介賞（通称：芥川賞）は、優れた純文学を書いた新人に与える文学賞のことである。直木三十五賞（通称：直木賞）は、新人・中堅作家問わず、大衆小説に与えられる文学賞のことであり、近年では中堅作家の受賞が多くなっている。純文学とは、芸術性や形式を重んじる小説で、文章の美しさや表現方法の多彩さが評価される。一方で、大衆小説は娯楽性や商業性を重んじる小説で、エンターテインメントに富んだ作品が多い。文藝春秋の創設者である菊池寛が、純文学を代表する芥川龍之介と大衆小説を代表する直木三十五、文藝春秋の発展に大きく貢献した2人の作家にちなんで文芸賞を創設した。



ずっと遠くに行きたかった。今も行きたいと思っている。
自衛隊の要員の募集も、なぜかあんなにいい感じ。自衛隊のメンバーが、サキは期待を今も持っている。

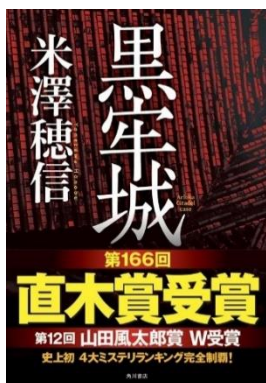
芥川賞受賞

芥川賞受賞作品 『ブラックボックス』 砂川 文次 著

——ずっと遠くに行きたかった。今も行きたいと思っている。

自衛隊を辞め、自転車便メッセンジャーの仕事に就いているサクマは、今日も都内をひた走る。ちゃんとしたいの、「ちゃんとする」とは何なのか悩んでいるサクマは、なかなか現状から抜け出せずにいた。

——どれもこれもが明け透けに見えているようで見えない。張りぼての向こう側に広がっているかもしれない実相に触れることはできない。



直木賞受賞作品 『黒牢城』 米澤 穂信 著

本能寺の変より4年前、天正6年の冬。織田信長に反旗を翻し、有岡城に立て籠った荒木村重は、城内で起きる難事件に翻弄される。村重は動揺する心を落ち着かせるため、土牢の囚人であり織田方の軍師・黒田官兵衛に謎を解くよう求めた。事件の裏には何が潜むのか。戦と推理の果てに、2人は何を企むのか。



直木賞受賞作品 『塞王の楯』 今村 翔吾 著

戦乱が絶えることのない戦国時代。源齋に石を見抜く才能を認められた匡介は、自分たちが石を積むのは、戦わない人々を救うためであると説き、平和を求めていくのだった。そして、落城しない城を建てることで戦国の世を終わらせられると考えた。一方で、匡介とは異なったやり方で戦国の世を終わらせようとする者がいた。鉄砲職人の彦九郎は、戦国の世を終わらせるために鉄砲を作っていた。「落城しない城」と「鉄砲」。どちらが、戦国の世を終わらせることができるのか。